

第四章 情炎の宴

1

夜陰に紛れて尾形玉江は裏道伝いに逃げた。

菊水山系の裏山に入り込む。

北神拘置所の北側は山深い地であった。

逃走者は、海沿いに東か西を指すか、北側の山に踏み込むかの選択をせまられる。

神戸の市街地は海沿いに開けていた。

山の方角にと逃げれば、何とかなると玉江は考えた。追手の数が多くない限り逃げ了せることは可能であった。戦時下のことで、大捕物が展開されるほどの状況でもない。

まして空襲の危険にさらされている毎日のことであつたから、なおさら、逃走者には好都合にできていた。北に入るには、一つは神有電鉄の線路伝いに最短距離を通つて山ふところに入る方法があつた。

北神拘置所から南側へ約三キロ下れば、湊川駅となる。湊川から有馬方面にと伸びている。

この私鉄は急勾配の線路道を北へ北へと登る高山電車であつた。途中の鈴蘭台駅の近くには、吉蔵の所有であつた旅館がある。

何度か、この私鉄に玉江も乗つたことがあつた。

菊水山系のやや南西寄りの近くには、かつて、平家軍を急襲したことで有名な古戦場がある。世に鶴（ひよどり）越えの逆落として知られる急な岩場があるところである。裏手の山々は裾野を巡つても、かなりきつい勾配のルートであつた。

だが、山育ちの玉江には暗い闇も、急な道も苦に

はならなかった。尾根伝いに素軽い歩様ですすんだ。それに、玉江には特別の動物的カンがあった。

目指したとおりの鳥原の水源池脇の道に出ていた。鍋蓋山、再度山（ふたたびさん）などの山頂きが、黒い山容を空に掲げている。眼が慣れて来ると眼の前の一步も危なげないものになった。

旧有馬街道筋の曲がりくねった一本道を木の間に隠れに何度も眼下に見た。

すでに二時間ばかり歩いてきた。山の端はまだ暗い。これからの長旅を考えて玉江は一旦、山を下った。

丹生山の麓を巡って、箕谷のたにあたりの百姓家にねらいをつけた。

こまでも続いている畑地だったが冬のこと作物は作られていない。平野部を風が吹き抜けていた。

さすがに寒かった。

やっと、雑木林の外れに一軒の百姓家を見つけた。裸の枝だけになった柿の樹がひゅんひゅんと風に鳴っている。玉江は母屋とは別棟になった納屋に忍び込む。木の扉に手を掛けたら、たてつけが悪いのかと大きな音がした。

納屋に積まれている藁の匂いが鼻に付く。どこを見回しても食糧らしいものはない。

だが玉江は食糧の在り場所をちゃんと探り当てた。種芋がどこかに保管してあるはずだった。入口際の藁を退けると床面に四角の木の蓋があった。

甘薯や、馬鈴薯などの種芋は地下の貯蔵庫に入れられ保管されていることが多い。木蓋をはねると、生あつたかい空気が手に触れた。手を突っ込むと、藁で保温されたその下に甘薯があった。急いで手でつかみとる。どんごろす製の布袋を見つけて、その中に甘薯を詰めた。縄でからげ背に負った。

再び山中に入り、二日の行程で三田きんだに出た。ここは山間の開けた街で、国鉄線の基点駅になるのでにぎわいがあった。

玉江は、三田駅の構内で買出し客の一人を見つけ、食糧にした残りの甘藷を中年の女に売りつけた。やつと少しばかりの現金を手にした。

誰れも玉江の風体を怪しみはしなかった。

神戸や大阪などで焼け出された罹災者が親類縁者を頼ってここまで逃げのびてきていた。駅頭はこた返していたのである。半日待つてやつと一枚の汽車の切符を手にした。

玉江の目的地はいつか住んだことのある生野だった。福知山に出、山陰本線で和田山まで行く。さらに播但線で南へと下り、生野(いくの)に辿り着いた。

路銀は使い果した。

脱走行の日からほぼ一週間が経過していた。途中、飲まず喰わずで過ごした。夜汽車の待時間間に民家や百姓家に近付き、泥棒猫さながらに残飯を漁った。軒先に吊るされたかぼちゃや、日干しにされた大根も口にした。身の軽い玉江は貨物車の屋根にへばりつき、無銭旅行を続けた。

寒風にさらされながらの脱出行だった。

わずかの問ではあったが生野は住んだことのある街である。姫路の料亭“播磨”の若主人、葉室勝を導いてやってきた土地でもあった。ここは二人にとって忘れられない思い出の地になっている。

この生野に葉室勝は眠っていた…。

その菩提をとむらうために二度、これまでも足を運んだ。玉江には好きな男とこの地で過ごした秘められた過去があったのだ。その悲しい思い出の糸をたぐるためにまた玉江は舞いもどってきた。

南の島の補給路は断たれ、沖縄決戦が火急の時を告げていた。資源不足の状況下、生野銀山は連日連夜の生産体制に入っていた。

黄銅鉱、閃亜鉛鉱などが主で、一部に自然銀なども産出した。これも戦争景気によるものだが、生野鉱山には最盛期五千人ぐらいが働いていた。戦争

も末期に近づいている時期で今は数は三千人程度に減っていたが、それでもまだまだここは活気を呈していた。生野駅の引込線には鉱山口とつながっている鉱石搬送路線が走っていた。帰りはトラックは空きになる。そのうちの一つに玉江は身を潜めた。

2

この日から玉江は生野銀山の廃坑の一つにおのが身を隠した。誰れにも知られることのない暗い闇を棲家としたのであった。

生野の地は中国山脈の分水嶺に位置する。隣接の氷上ひがみには石生ひさうの水分れ橋と呼ばれる橋があり、東西の水の流れもこの橋を起点とするといわれていた。全国で一番低い分水嶺なので、この地に注がれた雨水は南と北に流れ、そして流れ流れて、東と西への水路をつくるのである。

南は、高谷川―柏原かんばら川―佐治川―加古川―播磨灘の加古川系に。北は氷上の春日から黒井川へ、さらに、竹田―由良川―若狭湾の由良川系へとつながっていた。自然の奥深い山間に一歩足を踏み入れると、かつて栄えた旧坑口が今も各所にぽっかりと穴を開けていた。

江戸時代の番所地図を見ると銀山領は「口銀谷（くろがねだに）猪野々」「新町」「奥銀谷」「相沢」「小野町（のまち）」「白口」「銀山七町」で形成されていた。

黒井川に沿っていくつかの部落があり、要所要所に口屋番所をおいて交通をとりしきった。

「東西四里八町」「南北三里十九町」「面積五方里二分の一」と称された。だがその大部分は採掘のための山で、平地も耕地も少なかった。

姫路から生野へと通じる播但街道は、いくつかの険しい峠を越え、山口、中川、竹田を経て和田山に至り、和田街道となる。また、山陰道と交わって、福知

山、豊岡、湯島にと街道筋をつなげた。

いずれにしろ、旧幕時代は生野は山も活気を呈し、この地は殷賑はんしんを極めた。

織田・豊臣の時代は金香瀬が隆盛期で、それと共に新たに白口方面の若林・蟹谷・檜木などの鉱脈が発見され山は栄えた。銀山日記には採鉱時の排水作業の役目を負った樋引やいびき日雇が昼夜で千五百人にも及んだと記されている。鉱夫の下財、その助手の手子、運搬人夫などを加えると当時としては大変な人数だったことがわかる。

すでに、最新設備の整った今の坑道には往時の面影を見ることはできないが、廃坑の多くは江戸時代に閉ざされたものだから、その奥所は昔のまままで放置されていることになる。

明治に入ってから坑口入口は鉄囲いなどで封鎖されているので、玉江は鉱業所の本部のある相沢町のあるあたりを避け、街の中心部を外れた白口の若林山の山中から旧坑内に入った。

白口若林坑は宝永二年一七〇五に良鉱脈が発見され大いに賑わった。

当時一升の鉱石中に銀三百匁を含有する優良鉱であったといわれ「御所務山」に指定された最上級の山であった。

山師たちとつて「御所務山」の権利をうけることは最高の名誉であり、財を築くことも意味していた。

記録では坑口詰役人が三人もいたのは、この白口の山々だけであったという。

それだけ高品位の鉱山だったのである。

また白口若林坑は「千荷堀せんがぼり」とも言われ、鉱石一斗一升入りのカマス一箇分で、含銀量が二十匁乃至三十匁あったとされる。

勢い手子たちの数も増え、人口密集地としていまでも、白口千軒の謂(いい)が残されている。

だが明和四年一七六七の年が明けた一月二十

六日、若林坑内薄身八挺から採鉱箇所に出水し、多くの犠牲者を出した。

この水の突出事故で完全に地底の機能は失われ、白口若林坑は廃坑の運命を遮った。

それ以後、手が付けられていたわけだから、ほぼ二百年、この廃坑は幾多の犠牲者の怨みをのんだまま沈黙を守ってきたことになる。鉱石運搬に従事した手子の大部分は十一、三歳から十五、六歳の少年たち、いかに傷ましい事故であつたかがわかる。

玉江は、はじめ若林旧坑道に辿り着いた。

が、ここは明治年間にも採石が行なわれていた場所のでトロツコの搬送路線がまだ残っていた。トンネル状の入口あたりの広場は倉庫代りに使われているのか、古びた機械類がおかれていた。

人の出入りが考えられるのでここは避けた。四年前に、この坑口内には葉室勝と一緒に入った。

それ以後も二度、単身で玉江はこの山中に分け入った。玉江にとっては勝手知つたる我が家のようなものだった。

たとえ暗闇の世界であつても心が和む。

いや、闇の深さこそ彼女の傷ついた心を癒してくれるのだ。考えてみれば、都会に出てから十年近く、人に揉まれ、そこに醜い人間関係ばかりを残した気がする。

木地師、根岸豊吉は、素肌の木地の美しさを一人の少女に求めた。世俗の垢にまみれることを嫌った。だが、そんな一縷いちろの夢も消え、尾形玉江は肉体の成熟と共に世俗の垢にまみれた。

多くの男たちの卑しい欲望の残滓を、玉江はおのれの体に止どめている。義父を殺戮したことに端を発し、玉江は菅家吉蔵と、ぎんを殺め、そして、今一人、老看守の林亥之助をも手に掛けた。

もう一人……これから会いに行く葉室勝も、その犠牲者の一人ということになるのかも知れない。

若林旧坑道には入らずに、玉江は山を少しばかり登り、別の小さな坑口から暗い穴に入った。抜け道で、すでに何度か歩いた径路であった。

細い岩壁のトンネルで背をかめないと思れぬ。

玉江は中腰になり、岩天井に頭をぶつけないように用心しながら歩いた。

元は崩落した岩石が地底の道を閉ざしていた。陽を通さないで、行く手は真つ暗闇であった。

ほぼ、三十メートル、玉江が人の通れる道にした。体は疲れ切っているのに闇の空気を吸い、冷気に身をひたすと、気持がしゃんとしてきた。

足取りも軽くなる。

地底から噴き上ってくる風の動きを玉江は嗅ぎ分けた。坑道は手掘りで穿たれたものだからまっすぐの道はほとんどなく、採掘時も手当り次第に掘って行くので、本道はどこに地獄穴があるかも知れなかった。

まるで地底は蟻の巣穴、曲がりくねった何層もの縦と横の迷い道が随所にあるのだった。地底からの風はどこかに穿たれている竪穴からのものである。

壁を伝って歩き、やがて岩天井の仕掛け扉を探り当てる。そこだけ岩が平らになっていた。

左側の隅を押す。立ち上った姿勢で両手を平らな岩扉に当てていた。

ごとごと音がし扉が動く。四角く切られ天の穴だった。この抜け穴の上部は岩室になっている。

一間四方の広さを持った岩室は人工のもので幕府治下の時代、ここは地鎮のための神が祀られていた。地底の作業が困難を極め、多くの犠牲者を出したので安全祈願がここでは行なわれていたのだ。

そのことは、玉江は知らない。

彼女にはこの奥室が葉室勝はむろかつこの思い出の場所であることで充分だった。玉江は壁面にしるされた足場をのぼり、岩室に入った。

とても空気が冷たい。

岩室の奥所には今も神の祭壇があった。岩の壁に鳥居の形を表わした線刻が彫られている。

かつては坑口入口には、神前の鳥居を模して化粧木が嵌め込まれていたのだった。

神の聖域をあらわす線刻だったが、暗闇のとこで玉江は気付いていなかった。玉江の頼にやさしい笑みがあった。「勝かつさん」と口に出して呼ぶ。

誰れもない闇なのに、しっかりと何者かに抱きとられていた。

とても和やかな気持ちになり、瞼を閉じる。

闇に口づけしているかのように、かすかに顔を左右に振った。愛しい男の面影がふつと沸いて出ていた。

もう、葉室勝に会いたくなっていた。

岩室の縦の壁にもう一つ細工がしてあった。壁に寄り、顔をつけると一カ所だけ、わずかに冷えた空気がもれて来る場所があった。

どういう仕掛けなのか、その空気孔の下部の岩扉の場所を指で押すと、人が一人通れるほどの岩扉がくると動く。まるで忍者がえしの扉であった。

急に強い風が吹き上げてきた。玉江の髪が乱れ立つ。一瞬、鬼女に似た形相となった。

わずか一メートルほど先に、真直下の深い堅穴が掘られていた。井型に組まれた丸太で足場が組んでいたがすでに大半は朽ちている。

かつては、足場造りの男たちがいて、足場を作り、天井に支え木を張りめぐらせた。

その名残りの道だったが、危険なので、今は一本の雁木がんぎが穴底に向けて立てかけられている。

四年前にこの雁木は玉江が作った。七、八寸の釘の幹を何本も持ち込み、麻のロープでつないだ。

縄目が恰好の足場になる。急造の梯子である。釣瓶つる落しの堅穴に小石が崩れて落ちた。

一メートルほど下ると銅敷場第一掘下場に出た

。この胴敷場は本道につながっており、若林坑口の本
来の入り口と直結する。玉江はさらに横穴に入り
十五メートルほども進む。

真直下にまた堅穴があった。

山ことばで犬走りといわれる構造である。どこの坑
道も迷路のように入り組んでおり、天井が低い。

最深部は地下八百八十メートル、もちろん、これは
近代工法によつた採掘跡の話だったが、旧鉱も手掘り
とはいえ最深部は優に二百メートルはあった。

間歩まぶどと呼ばれた坑道は薄身八丁の内で、この
地下奥深くでかつて傷ましい水没事故があった。

どこことなく薄気味の悪い闇の底である。

ひゅーひゅーと、空洞を揺るがして鳴る風音がいつ
も地底では沸き起っていた。

坑内道は湧水ゆうすいを吸い上げる水抜き樋
道やいみちど、風の吹き抜け穴が各所に作つてあつた
。場所によつては吹き溜りとなり、風向きの具合いで
笛音が発せられるのだった。聞きようによつては地底
で命を奪われたものの悲ししみの声ともとれた。

玉江はやつと目的の場所に辿り着く。

青白い発光色がある。ここは氷の結晶体で飾られ
た零下五度の世界であつた。

わずかにどこかの天の穴から明りがもれていた。

三メートル四方の横に細長い洞には、氷のつららが
、鍾乳石七ようにゆうせき)のように天井から垂れ下
つていた。天井は低く、立ち上ると頭がつかえる。

氷のつららは紫水晶の叢林そうりんのように妖し
い光を放つていた。玉江の吐く息だけが白く浮き出
される。ここは死者の世界だった。

もう玉江には風音も聞えてはいなかった。

一人の男が凍てついた岩穴に身を置いていた。

まだ生きているように見えた。

この死体の男こそ、“葉室勝”であつた。玉江は壁に背
をもたせた男の体にそつと身を寄せた。

「勝さん、うちまた来たでえ。淋しかったやろな。これからはずつといたげる。うちが死ぬまでな。あんたとずつと一緒にや。もう、どこにも行かへんでえ」

玉江は男に語りかける。愛しそうに男の体を抱いた。頼に顔を寄せる。死人の顔は冷たい彫刻の面を持っていたが、玉江には今にも葉室勝が口をききそうに思えた。端正な顔立ちは今も変わらない。

無口な男に変つてしまっただけのことだった。

玉江は唇を合わせる。その冷たさを厭う気持はない。やさしく唇を触れると玉江の唇のあたたかさが男を生き返らせるように思えた。

それで、いつまでも唇を合わせていた。

その夜、玉江は一晚、男の死体に添寝した。

死んだ愛人のそばにやつて来たのはこれで二度目のことである。神戸に住み始めてから二度、人目を忍んで玉江はこの地にやつて来た。

夢の中で、生きている葉室勝に抱かれた。そう願っていたとおりに、玉江は男を引き寄せていた。

やっぱり冷たい体をしていて、どことなく硬い表情をしていた。早く、体を刺し貫いて欲しいと思う。どこか遠くに男は逃げて行きそうに思えたのだった。

だが、いつまでも夢の中の男は、玉江の肩に手を回しているだけで一向に激しい情欲を玉江に向けて来なかった。もどかしい思いに「抱いて！」と声をあげた時、玉江は眼が醒めた。ぶるつと体が震えた。

疲れのために寝入ったが、この寒さでは朝まで眠つてられるはずはなかった。

薄明の闇に眼を向けると、剣先鋭く氷のつららが、自分を狙っていた。「ああ、わたしはやっぱり一人なのだ」とあらためて思い知らされていた。

て短い歳月で燃えつきた。昭和十四年の春、二人は姫路の料亭“播磨”で深い仲になった。

玉江は二十歳、男の精を吸いつくして生きて来たためか、この年にしてすでに不思議な色香を漂わせていた。一介の仲居にしかすぎないのに、はじめから勝は玉江に男の情のようなものを寄せて来た。

齢が若かつたせいもあるが玉江は色白で腰太の女、男好きのする肢体を持っていた。玉江は十六の齡から客をとるようになり、その間、神戸、福原、尼ヶ崎の三業地、富山の清水などの地を転々とした。

世間のことを知らぬ山家の育ちのために遊女仲間からも馬鹿にされずいふんと辛い思いもした挙句に、やっと客扱いに慣れ、同輩ともうまくやって行けそうになった時、客の金に手を出し、ひどい折檻を受けた。

はじめに売られた神力楼から鞍替えさせられ、一時、尼ヶ崎の二流どころの妓楼に身を置いた。売れっ妓で、たちまちのうちに店の看板女郎になった。

好きな男ができて足抜け逃亡騒ぎを起し、捕まった末に前にも増した折檻を受け身を落されて、今度は富山の清水で客をとる身になった。

たまたま客の一人に、ロッキ屋の男がいて、上玉と見たその男が玉江の抱え主に話をつけ、金で買われてまた神戸の福原に舞いもどった。

今度は西門筋の小楼で、格落ちであつたがここでも売れっ妓の一人になった。この小楼と、仲之町・桜筋の鶯宿楼が経営者が一緒で、玉江は客筋のいいこの妓楼に移る。これが縁で、十九歳になった時、神戸の乾物屋の老主人に身請けされた。

六甲・石屋川の高台に一軒家を与えられ自由の身となった。もつとも妾暮らしに变りはなく、六十二歳の老人の手なぐさみものにすぎなかったが、ともかく借金のない身にはなつた。

それが本家で老主人は急死、思いもかけなかつた

ことだが、なにがしかの金が手元に残った。謹厳居士のような堅物の番頭が来て、あと始末をした。

「これまでの身持のことを懇々と諭され、まともになることをすすめられた。

と、いつて当時の世の中に、無学の女が働けるような職場はなかった。お茶屋かカフェー、呑み屋の接客婦、体こそ売らずにすんだが男の歓心を買う仕事しかない。結局、齢が若いのに、料亭“播磨”の仲居になる道を選んだ。住み込みだったので、いくらかでも貯えができる」と玉江は踏んだのだった。

もちろん、玉江の過去のことは、勝は何も知らなかった。化粧を落し、素颜になると、まだ玉江の横顔には純などころがあるようにも見えた。

しっかりと肩だったが細いのでかたちがきれいに整っていた。眼は大きくも小さくもない。やや三角眼で、眼頭の下部分が少し切れ込んでいるのが欠点だったが、それとて見様によっては色っぽかった。

二重瞼だったが、少し眠い感じの瞼で、時に腫れぼつたくなることもある。いわゆる淫乱の相、唇を舐める癖とともに、この女が、かなり好色であることを示していた。なにより色の白さが男ごころを惑わせた。

襟足の白さに、勝は眩しさを感じた。

少し流し眼加減に男を見る仕草にも、どこか男を誘う科せなが表われていた。

玉江も、この二十八歳の若主人を一眼見た時、惹かれるものがあつた。無口だったが、やさしそうな双眸を向けられると体の奥からぞくぞくと来るような感じが沸き起つて来るのだった。

足が疎むような思いにもなつた。

こんな感じを持ったのは生れてはじめてのことであつた。勝には男の色気のようなものが漂つていた。

女形の役者を見るように玉江はしばらく勝の横顔を見ていた。“この男性とは抱き合うようになる…”

玉江の生理感覚は、この時すでに、男の眼には見え

ない肉体によつて抱きとめられていたのであつた。

勝には同じ齡の妻がいた。芸者上りの女で、氣が強
く、その上やきもちやきの女であつた。仲居たちの噂
では上客はこの妻の小ぎくの元々からの馴染み客で、
勝は女房には頭が上らないと陰では囁かれていた。

仲居として住みついて十日目、この日、玉江は久し
振りに姫路練兵場近くまで出かけてみた。

前に何度か来たことのある場所である。

まだ桜は開花していなかつたが姫路城のお濠端に
はずでに春の氣が充ちていた。

生あたたかい風に花曇りの空、すでに桜のつぼみも
開花を待つばかりのふくらみを見せていた。

播磨は龍野の市之橋の近くだつたから姫路城は歩
いて行ける距離にあつた。

城郭の外れに陸軍の建物があるので、玉江はお濠に
沿つて散歩がてら歩いたのだつた。

珍しく、白い開襟シャツを着た勝が行く手から姿を
現わした。ふらりとやつてきたといった感じではなく、
どこかぎこちなく見えた。あとをつけて先まわりし、
横路から姿を現わしたといった呈をして見せた。

笑うともなく笑い、勝はひとり頬のあたりを硬直
させた。照れているようにも見えた。

むしろこんな時は、玉江のほうか、扱いがうまかつた。
「あらら、とんだ道行き、ね。よかつたら元来た道にい
かへん。うち、このへんのことなんも知らんのよ」

案内してくれとせがんだ。

「ああ……うちかいな」

ちよと戸惑つたふうの顔をしたが、彼はぐるりと踵
を返した。やつと二人は肩を並べた。

一時間ばかりだつたが、茶店で白酒をのみ、意味も
なくあれこれ買つては食べた。関東煮かんとうだきに
豆菓子、帰りには勝が金平糖を一袋持たせてくれ
た。それですっかり玉江は嬉しくなつてしまつた。

いや、正直のところ、判りあとの青々とした勝の男

らしい顔を眼近で見たら、変な気分になっていた。男の匂いを嗅いだ気になり、うつすら汗が体に浮いた。

乾物屋の男が死んでから三か月、玉江は久しく男に抱かれていなかった。

「あのな、明方、待つてえさかいにうちの部屋へ来てもええよ、それとも、おかみさん、うるそうてどもならん？」
「そないにあわてたらあかん。わしな、考えてる」ことがある。ええか、今度の休みの日にな、わしがええとこに案内する。それまで待つてて欲しいんや」

勝の眼は大きく、切れ長だったのでじつと見詰められると、ぞくぞくつとした。玉江がいちばん好きなのは唇だった。やや下唇が厚い。

それに男にしては珍しく赤味を帯びた唇をしていた。色も白いほうで余計に役者顔が引き立った。

玉江がこれまで相手にした男たちは、日高の山で会った凶師衆三を除けばだれもただの男でしかなかった。恋心を抱いたのはこの男だけで、遊郭にいた時に一緒に逃げた男は、遊女仲間との鞆当きやあててがあつてのことだった。

が、葉室勝には大人の男の魅力があつた。

凶師衆三のように若さだけの持主ではない。

それにどことなく勝には翳りがあり、気弱なところもあつたので玉江の母性本能もくすぐった。

頼りない感じは女形顔のせいもあつたが、一つは若い時に胸を患い入院生活をしたことがあつたからであつた。そのために徴兵を免れていたのだが、生来の腺病質のせいでは彼は可弱い男に見えた。

玉江はいつも男たちの性の道具として扱われてきた。今は自由の身だった。はじめて、自分のほうから身を投げ出すことができる男に巡り会った。

ほんとうの意味で、玉江は心も体も解放されていたのであつた。

勝と玉江は次の休みの日、姫路郊外の小さな待合いで逢った。前の日の夜、彼は玉江の耳にそっと囁いてみせた。

「わしな、あんたが好きになつてる。初めてだな、男と女子おなごみたいなんや、この前から胸がどきどきどきどきしてるのや」

調理場に足を運ぶたびに二人はそれとなく視線を交わした。後ろ姿にも勝の視線がまつわりついているのを感じた。男と女の情が通い合った。

待合の離れ座敷で二人きりになると、また、勝はぎごちない男になった。昼間から二人は差しつ、差されつ、ほろ酔い機嫌になった。

勝の首筋が赤味を帯び、なおのこと、眼がやさしくなった。早く抱かれないのに、勝はなかなか手を出さなかった。これまでの玉江だと、すぐにでも男にしただけかかって行くのだが、なぜか、この日ばかりは禪られた。

玉江は焦らされていた。

こんな思いになったのは初めてだった。

「うちお酒のんだら、体中にな、心臓がたんとあるような気分になるのや。どきどきしてて、ほら、この手首とこにもちっちゃい心臓があるみたいなのや、さわつてみ」
とうとう待ち切れずに玉江は着物の袖をまくり

手を差し出した。

勝は玉江の手を握ることをしなかった。

「あんな。わし、玉江ちゃんに、お願いがあるんやけど、聞いてくれへんか」

間合いを計ってから、ぽつりと勝が言った。

「ええよ、なんや、うち、勝さんの言うことやったら、なんでもきけそうなのや。死んでくれと言われても、うちは平気やでえ」

「いや、あんな、はずかしいとんや」

「はずかしいとて？」

「あんな、男と女がな、抱き合うというのは、はずかしいし

いことやろ」

「……なんや、ようわからん」

「ほなら、はずかしいよ」

「えらい、勝さん、もったいぶってるな。ええんよ。うちかて、勝さんのこと、好きになってるんやから」

「ええか、そのな。わし、玉江ちゃんのは、ただか、見たいんや、そいでお願ひがあるのや」

「うちはどないすればええん？」

そろりと勝ち上り、隣室の寝間に玉江を伴った。

それから玉江だけを残し、寝間を出ると、境いの襖をまた閉めた。二人は隣り合わせの部屋で離れ離れになる。襖越しに、勝が命じた。

「みんな脱ぐんや、脱いだらな、わしにおしえてくれ、早（はよし）」

玉江は着物の帯をほどき、下帯を取った。

妙な気分させられた。勝が隣室からのぞいているのではないかと思った。が、そんな気配はなかった。

つけさげ小紋の合着を肩から落とす。

御所車に小花をあしらった着物が、はらりと足元に落ちた。赤い長襦袢を払うと、女の肉のかたちがそこに表わされた。ためらわず、玉江は肌襦袢を捨てて。ズロースは初めからつけていない。白い足袋だけをつけた女が、青畳の上に立っていた。

「あのな、みんな脱いだらな、長襦袢だけ着るのや。わしにな、玉江ちゃんの体が見えんようにして欲しいのや」
言われたとおり、玉江はすすべした羽二重の長襦袢を拾い、身にまとった。

「うち、言われたとおりにしたで…」

「ほな、わしが行くのを待って」

まるで初夜を迎える男と女のようにであった。

玉江は床入りの儀式に付き合わされている気になった。しばらくしてから、やっと勝は寝間に入ってきた。そつと薄眼を開けて勝を迎える。

すでに勝は素っ裸になっていた。

玉江は男の股間にそそり立っているものを眼にした。「玉江ちゃんのだ、体、わし見たこともないし、手を握ったこともあらへん。二人ともまだ無垢や。そやからな、ゆつくりとな、わし、玉江ちゃんの体見せてもらおうで、この手かて、はじめて触れるのや」

玉江は赤い襦袢を身にまとい、掛布団から首だけ出していた。掛布団をゆつくりと剥がれた。赤い長襦袢に裸身をまとった女があお向けに寝ていた。

勝の手指が長襦袢の襟の内側をなぞる。胸元から上にとなぞり、襟の片端をつまみとった。

そそーと手指は動き、先ず玉江の左の乳房を露わにしていた。白い首のあたりから、片方の乳房だけがその時、男の眼にさらされていた。

痛いほどの視線を露出された部分に感じた。

触れられてはいないのに乳首が立つてくるのがわかった。初めての経験であった。その部分だけに男の眼が向けられているように感じられた。

もう触れて欲しくなっていた。

色が白いので、薄紅色の突起は際立った。玉江の乳首はつんと立った。ふくよかな乳房で乳輪も大きい。

その時、勝は、わし掴みにしたい衝動に駆られていたが、じつと我慢した。この女の性に対する感応のほどを、おのが眼でたしかめた。

乳房には横に一筋、小さなへこみがあった。

だが、勝が見つめているうちに、内部から、ぶくつと盛り上ってきた。凄いものを見た思いがした。

抱かれたくて内部から燃えて来る女が好きだった。この女はわれを忘れて乱れる女だと思った。

今度は右側の乳房も露出させた。それで、右と左の乳首の表情に気付かされた。はじめに露呈させた左の乳首だけが固くなっている。たった今、そつと剥がした襦袢の下の右の乳首はまだ突起を示していない。ふーと熱い息を勝は吹きかけてやった。

たちまちのうちに、鮮紅色の突起が示される。ぶつ

くりと首をもたげてくるその様に勝は驚嘆した。男自身のものが力が漲つて来る様子とそっくりあった。「ええな、ええ……」

思わず勝はひとりごちる。

「うち、勝さん好きになつてる、はよ、はよ、欲しいんや」

玉江は身を悶えるようにし、頭を左右に振った。

「うち、なんや、はずかしい……」

「はずかしいからええのや、男と女のな、このはずかしい気持がたまらんのや」

まだ勝は指一本触れて来ない。焼き付くような視線だけが、玉江の裸の上半身に注がれていた。

「もういやや、みんな見て欲しいん」

玉江は、わざと襦袢の袖を乱した。

立膝をし、白い太腿を露出させた。

「なにする。わしの言うとおらせえ」

勝は玉江の下半身は見ていなかった。

身をよじらせたので、乱れ姿を想像したのだった。

赤い襦袢を下半身だけにまとった女がそこにいた。

「もう見たる。じつとしとるんやで」

まるで窃視者の視線だった。

襦袢に手がかかる。すーと剥ぎ取られて行く。見る者と見られる者の気持が一つところに集中した。玉江は、毛穴の一つ一つが寒気立つような感じを持った。

足の付け根に沿って赤い衣裳を剥かれていった。

白い恥丘地帯に密生した黒い陰毛が飾り立てられている。ちよつと猛々しい。ふわーつと陰毛の林が、そよぎ立つ。なよなよした感じではない。

真つ黒の陰毛地帯は、それ自身で強い存在感をそこに作っていた。秘部はまだ隠されたままだった。

勝は、陰毛のすべてを引き千切りたい思いに駆られてもいた。大人の女のしるしをそこに見た。

黒い衣裳を身にまとった女性器は、隠されているが故にエロチックなのだった。下毛の、直毛質の、硬い毛にまたこの女の好色さを見た。男のような毛質である。

すべてが取り払われた時、すでに玉江の首筋のあたりには、うつすらと紅が染みこんでいた。

乳房の下、心臓のあたりにも血が集まっている。胸の動悸も激しさを増しているようだった。

「さあ、みんな見せえ、もうはずかしがらんでもええ、自分でな、ちゃんと見せるのや」

端正な顔立ちの勝とはおよそ無縁と思われる押し殺した声だった。まるで好色な老人の口吻りである。

「そうや、開くのや。な、今度は玉江の番やでえ」
それですっかり狂わされていた。

今の今まで勝は玉江に見られるだけの人形になることを強いていたのだ。それが、攻守ところを変えた。

玉江の本性である好色さに火を付けた。

玉江は両膝を立てた。よく見えるように腰を少し上げる。その下に勝が腰枕をあてがった。

商売で男客に強いられた時は屈辱的だと思った。

が、好きな男にならずべてを見せたかった。

見て欲しかった。ああ、勝さんがニを見てると思った。

いや、あの痛い視線になでられていた。もう玉江の裂口部はたっぷり濡れていた。

勝はそこに新たに溢れて来るものも見た。

光っている。まだ口づけさえしていないのに、玉江はすでに内部から濡れていたのだった。

勝は眼に止めた時、玉江を歓ばせる愛撫の方法を見つけて出していた。裂口部にそったあたりも陰毛で飾られている。会陰部にかけても黒い疎林が伸びていた。ふつと手を伸ばし、縮れ毛に指をからませてやった。

その毛先で、敏感な内腿の両脇の溝をくすぐる。さらに蟻の戸渡りと呼ばれる双丘の谷間を刺激した。

玉江は玉江でもう大胆になっていた。

もどかしい思いが耐えられなくなり、縫合部の小さな突起に指を添えた。基底部を指の腹で押さえ、自分の好きな震動を伝えた。この、勝との初めての交合で、玉江はすっかりこの男の虜になってしまった。

「これまで経験した男たちにはないやさしさと激しさがあった。初めての経験をいくつかさせられた。

巧みな性技を施された。

勝は舌先を硬くし、棒状のものにしてから、肉壁に刺し入れた。口辺のあたりの肉瘤に得もいわれぬ刺激がもたらされた。アヌスも執拗に責められた。

下半身の力を抜かせておいてから舌先を結瘤部に分け入れさせる。とたんにそこが絞られ、ぬるりと舌が逃げた。同じことを何度もやられる。

敏感な鈴の部分の愛撫も、口中に含んでは吐き出す性技のせいで、凄い感じがそこにつくられた。

何度も絶頂感の高さを味わわされてから、やっと勝は体をつないだ。腰の動かし方も巧みで、これまた生れて初めての玉江は失神感覚を味わった。

結合部の緩急の刺激に加えて、勝は指を小さな突起部に密着させ、しごいてきた。

それで熱覚が生じ、子宮の奥に律動が伝えられた。「行く……」と思った時、子宮の奥の熱い感覚が、そのまま腹腔の中にまで上ってきた。

内部がよじれてしまいそうな「わさと共に腹腔が絞られた。「あーっ」と声をあげた時、なおも、その帯状の熱線は体の中心部を貫き、咽喉に苦しさを伝えた。

息ができなくなっていた。

とたんに、大きく口を開け、喘ぎ声を発していた。

口一杯に息を吸ったつもりだったのに、息ができなくなり「あーっ」と吸う息で悲鳴に似た声を出していた。

後頭部に痺れがきていた。

息苦しくなればたばたしているのに、その時、軽くではあったが勝の右手がかぶさり玉江の首を締めた。

それで余計なこと、玉江は酸欠状態になり失神した。「あー落ちて行く……」と、何やら呟く。

頭の後ろからふーつと落された。

気が付いたら傍らに勝のやさしそうな顔があった。

玉江の顔をのぞき込んでいた。

「ええのんや、玉江ちゃんのはえらい」と締まるんやから」
勝は玉江の髪を撫でさすった。嬉しかった。

いつの場合も、玉江の体を金で買った男たちはおのれの欲望を捨てるのに熱心なだけだった。

心底からのやさしきをもつて接してはくれなかった。

男たちの思いの中には、玉江の肉体は穢れたものという
商売女へのこだわりがあるようだった。

勝は、玉江の過去のことなど聞きはしなかった。なににより、処女の女を扱うように接してくれた。玉江ははじめて男と女の対等の付き合いをした思いになった。

「このままや、このままな、ずーと抱き合っていたいのや。ほかのことはなんも考えとこうない。わし、玉江ちゃんのこと好きになつてしまつたわ」

「ほな、うち、今夜はあんた、おかみさんのとこへ返さへんで」
よしや。いまがいちばんええ。玉江ちゃん、ほんまに、きれいな体してるな。わしな、玉江ちゃんが、月一度のな、あの女の病いるときかて、あそこ舐められるぞ。ほんまに好きやつたら何だつてできるのや」

玉江は手を差し出し、勝の髪に差し入れる。勝の男の乳首には何本かの毛が生えていた。玉江の指は面白そうにその毛に触れた。今度は玉江が勝のものを口に含んだ。回復してくるとすぐに体を合わせた。

その夜は二時間ほど、うたた寝をしただけだった。睡魔を払いのけるとまた二人はお互いの体を貧り合った。

とうとう枕元に洗面器を据え、二人は手洗いに行く時間も惜しんだ。

結局、三日二晩もの間、二人は裸の暮らしをした。

床に入ったまま酒肴をとり寄せ、いい気な流連るれんの道行きを楽しんだ。

その時、料亭“播磨”は多額の借財を負っていた。

女将の小ぎくの金使いの荒らさと乱脈經理のせいで身代は傾いていたのであった。

居続けの流連騒ぎはすぐに小ぎくの知るところとなった。待合の金を払うために玉江は一度“播磨”まで単

身帰った。問い詰められた時、「あの人はもう、うちのものや」と玉江は開き直つてみせた。

「金ものつて、そないな」としたら恥や。これ持つて行つて連れて帰つてきなはれ」

小ぎくが眼の前に突き出した金を突き返した。
少しぐらいの金ならあつた。

情婦気取りで、自分の金を持ち出し、待合の金を払つた。もどると場所を変えて、また二日間、都合四日の間も、勝(かつ)を独り占めにした

「おまえの体はえらいこと感じる体や。体中だな、ええええ言うてる。他の女が見たら羨ましいことやるな」
勝がそんなことを言ったので、馬鹿なあそびがしたくなつた。芸者を揚げてのあそびのついでに花代をはずみ、二人は芸者の一人を見物人に仕立ててことに励んだ。玉江には異常の血が流れているのか、この時ばかりは見られていることで凄声を出した。

「えらい感じてはつたんやな。そやかて、お腹のところがない、きゅーと内に引つ込んでしもうて、ぶるぶる震えてるのや。ええ眼の保養させてもらいましたわ、旦那さん、床上手でよろしゅうおましたな」

中年増の芸者は、京ことばで感じ入つたふうのことを言つた。結局、四日続きの流連も金がなくなり、二人はまた“播磨”にもどつた。

小ぎくは腹も立てぬふうの顔をした。が、ちゃんと二人への制裁法はその時頭にあつたのである。

何日かの後、小ぎくは店のありつたけの金を掻き集め、いずこへともなく出奔してしまつた。男と逃げたのだつた。玉江は、勝を一人占することができた。

これまでの夫婦の寝所に入り込み、女房顔をした。だが、すでに料亭は立ち行かなくなつていた。

女手一つで切り盛りしてきたような店である。調理場だけを受け持ってきた彼には客扱いはむりだつた。まして多額の借財があつた。

心労がたたつて勝の胸の病いが再発した。

一時的にこの病いは、恢復期を示すが完治するのは難しかった。戦前・戦後にかけての「死病」の最たるものであった。勝は一度ならず咯血かつつした。

それでも、玉江はこの男の体が好きで好きでたまらなかつた。それに体は弱つても性欲だけは充進するのが肺の病いの特徴だった。

滋養物をとり、安静にしているのだから、一時的にせよ体力は恢復するのである。いつも微熱の出ている勝の面は、ほんのりと赤味を帯びていた。

色の白さに頬の赤さ、お稚児さんを見ている気にもなつた。おのれの死期を感じとっているのか、勝は玉江に激しいものを求めた。その激しさの中で死のおそれを忘れようとしてもしているかのようだった。

もつぱら、二人の愛し方は、玉江が主導することですめられた。男の体力の消耗を防ぐために、玉江が上体をかぶせたのだった。ある日、勝は怖い顔になり、玉江に特異な体験を強いた。

「あんな、わし、この世で最高のことをして死にたいのや。凄いい感じになりたいのや」

それだけでなくとも二人の性の儀式は少々常軌を逸したものだ。いつも、玉江は勝に首を締められた。

「わしと一緒に死んでくれいうたら玉江は死ぬるか。どや？」

「当たり前やないの。うちはあんたと一つの体や」

「よつしや、ほなら教えたる。わしな、若い時、女を強姦して殺したことがあるのや。なんや、驚かへのか」

玉江が平然とした顔だったので勝が途中でことばを折った。

「そんな」で驚いたりせえん。うちかてもしかしたら人殺しかも知れへんやないの」

「ほなら二人とも人殺しや。そういうことにしと。そいでな、そんな時、入れたままで首を締めたらな、苦しいもんやから女のおそ」がえらい締まったのや。腰に力が入つてな、中心部が痛いほど締まったのや。そんな時の感じ、口で

はよう言わん、ともかくな、止めてくれ言つて叫びそつになるぐらいやつた」

「うちも、あんたの首、締めてやりたいわ、男はんのはどないなるのや」

「そらあ、びびつと来る感じがたまらんのとちやうかあ」
二人は危険な会話を交わした。

「わしがな、行きそになつたら玉江の首締めたる二人一緒に行くのが最高や。ほんまに苦しゅうなかつたら最高にはなれんで」

玉江は、勝の体の上に乗る、腰を動かし始めた。
勝の頬に赤味がさす。

この頃は腰の動かし方もうまくなった。
張つた腰が円を描く。体重をかけてはまずいので、男の体の上にしやがみ込む姿勢をとつた。

豊かな腰が、男を楽しませるために大小の円を描き出した。正面向きの玉江の股間に勝は視線を注いでいた。黒く猛々しい陰毛が密集しているのが見えた。
自分のものが、くわえ込まれている。

玉江の内壁はとても狭い。内部まで肥厚した肉が付いている感じで、すっぽりと包まれている感じがあつた。
律動が、びびつと、どこからともなく沸き起つてきた。
ゆさゆさと白くて豊かな乳房が揺れている。

「つかみとりたい」。いつも、勝が頭の中に思い描くことがある台詞である。その玉江の、弾みに弾む両の乳房には、若々しい生命力が充ちていた。

が、その時、勝の眼の前が急に暗くなり、じーんと耳鳴りがした。きれいなまま輝いて見えた玉江の肉体が、なぜか遠い存在になつていく。胸の奥に鼓音を聞いた。

こぼつと音がしたように感じた。急に、彼は咳込んでいた。「うつ」気道に血が充ちていた。

「あつ死ぬ」と勝は思った。

体の上の重量物をはねのけたのだが、もうどうにもならない。自分の顔に向けて血を吐き出していた。

「あつ、勝さん……」

と、玉江が叫んだような気がした。

その時、勝の顔は血海の中に埋まっていた。

咄嗟に、玉江が体を退き、勝の体をうつ伏せにしたので、窒息するのをまぬがれた。この日から、医者に絶対安静を申し付けられ、勝は寝たきりの身となった。

そんな抑制の時を経て、再び、強烈な“性の宴”に、玉江が誘われたのは一月後のこととなる。

春も終り、初夏の風が爽やかに吹き過ぎた。萌黄色の若葉が生命の新しさを芽吹かせた。

自然の息付きばかりはいつもと変わることはなかった。

昭和十五年。

この年、戦時体制を整える意味から隣組制が実施された。米麦の供出、食糧や他の物資の配給制度の実施、貯蓄・公債の割当て、そして防空訓練と、上意下達の必要性からこの隣保組織は作られた。

生活必需品は配給切符制になる。「八紘一字はちげんいちう」「一億一心」が叫ばれ、合わせて横文字が敵国のことばとして使用することを禁じられた。

ドレミファソラドは「公赤トイロになり、野球のストライク・ボール判定の呼称は「いい球」だめ球」となり、煙草のチラーは「桜」ゴールデンバットは「金鷄」きんしと改められた。

奉祝紀元二千六百年の記念祝典が皇居前広場で行なわれたのもこの年である。

支那事変四年目を迎えたこの年、臣道実践を唱えた大政翼賛会が戦時協力体制を旗印に発会式を行った。戦時食糧報国運動として“節米デー”も登場、配給米は外米混入が六割となった。

“ぜいたくは敵だ”のスローガンのもと、ぜいたく禁止令が出た。太平洋戦争開戦一年前のことであったが、すでに戦時体制の締め付けは色濃いものになっていたのである。

だが尾形玉江にとっても、葉室勝にとってもこの戦争は何の意味も持ってはいなかった。

まして玉江は「男の戦争」とは無縁のところにいる。

世の中がどう動いて行こうと、女一人の生きざまを変えられることはできなかった。

大きな時の流れとは相容れぬ、あくまでも個人的な日常だけしか彼女にはなかった。玉江は自由な性の世界にだけ耽溺して暮らしていたのだ。

「誰れが何と言おうと、こうやってな、二人が抱き合っているとこには誰れも入って来きいん。どんな変態でも文句は言われへん。そやろ、一億一心、けつこうやけどな、銃後に残った男と女のな、枕探しはでけへん。ほんまに布団の中ではなにしても自由や」

勝の、これは口癖だった。男と女だけの小さな世界、いや、今の二人にとっては裸身を接している時だけが生の充実感につながった。二人きりの情炎の火に灼かれて、日々、奇妙な性の宴が繰り広げられていった。

「あのな、わしはミイラみたいに骨と皮になってもええで。ここがあかんようならならな、わし、副木そえぎしてでも入れたる。いや、この舌だけでな、行かせてしもたる…」

狂気じみていた。

寝たままの勝は、自分の顔の上に玉江の秘部を押し付けるように言った。妙な体のつき方だった。

勝の口のあたりに裂口部を近づけると、あお向けのままの勝が、指でひそみを分け、浅く、深く舌をあそばせた。玉江は腹這いのまま、畳の上に両手をつき、腰だけを男の自由にさせた。

溢れ出て来るものを勝は呑みとるように強く吸った。時に、勝の吐く息が熱っぽく感じられることがあった。発熱しているのだった。

勝は、おのれのを玉江にふくませたが、決して気を行かせなかった。なにか決意しているような口調でそれ以上のことを拒絶した。

料亭“播磨”は人手にわたることになった。

それでも、連日借金取りがやってきて病床の葉室勝を責め立てた。病状も思わしくなかった。

ある夜、玉江と勝は申し合わせて、夜逃げ同然

に家を出た。播但線の終列車に乗り、玉江が案内して生野の駅に降り立った。

二人には心中の約束事ができていた。

その夜は駅前の旅館で一泊した。勝は旅の疲れから高熱を出した。玉江は一晩中、氷枕をとりかえ、咳込む男をやさしく看病した。

「な、わし、はじめて玉江を見た時、なんでや知らんけど、えらい興奮したんや。男のもんがびーんとなつて、なんや、はずかしい思いをしたのや」

「うちかて、変だつたんや。勝さんに引き寄せられるみたいにするーとそばへ行つたのや。なにも用ないのに」

「おまえに会えてよかったわ。これは前の世からの縁えにしや」

「ね、うちのどこがええのや」

「入つてる時の感じがええ、じわじわーと締まって来よる…」

やつと熱が下つた朝まだきの時、どこか勝の表情は和やかさに充ちていた。旅館の女中が止めるのを振り切つて朝方その宿を出た。

一台の荷馬車を見つけ、頼み込んで便乗させてもらう。若林山白口の村外れで二人は降りた。

裏道伝いに、人目に付かぬよう山に分け入った。

今年は例年になく春が来るのが遅かった。

“ひかげつつじ”がまだわずかに淡黄色の花を残していた。岩肌を這うようにして群生するこの地だけのつつじ科の植物で、ひよろひよろした枝が二メートルほどの長さの枝を張っていた。

岩地が多いので際立つて大きな樹木はない。低木の群生だけを見ることのできる岩山が幾重もの丘陵を広げていた。キキキーツ。どこの谷からか、百舌の鋭い鳴声が聞えた。清澄な山気を切り裂く。

玉江が導いたのは白口坑の奥所だった。

「誰れにも見つかりとうない。わしは闇の底で玉江と一緒に死にたいんや。ここやつたら葬式もせんですむしな、

ほんまに一緒に死んでくれるんか」

狭い廃坑内のことで、勝の声はぐもつたものになった。足場がとても悪い。白口坑が廃坑になったのは江戸の頃のこと、その後この闇の世界に足を踏み入れた者はおそろくないはずだった。

二人とも、一寸先の闇を手探りで分けた。廃坑の入口は、人が立てるほどの高さがあったが、すすむにつれて天井が低くなった。先導をつとめたのは玉江だった。闇の気配を感じとる天性の勘が働いた。

深い竪穴の前に立つ。下から吹き上げて来る風が玉江の髪の毛を撫でて過ぎた。危険な落とし穴だった。

岩盤も弱くなっているのか、爪先が砂礫の道にのめり込む。石を一つ拾って投げると、音が返ってきた。

それほどの深さではない。

用心して深みに足を差し入れたら足場組みの雁木がもろくも崩れた。坑底に入るために井型に組まれた丸太の足場である。

用意してきたロープを深みの穴に投げ、ロッククライミングの要領で先ず玉江が下に降りた。

深さ七、八メートル、それほどの深さではなかった。

やつと見つけた場所は奇妙なからくりのある場所だった。ぐったりした勝を闇の中に残し、玉江は坑道の中を探索した。迷路に入り込み、行き止まりの道に行き当たった。と、かすかに行手を遮っている岩壁のどこからか、冷たい空気がもれてきた。

手で探る。その一点を探り当てた。

そつと手で押したら岩壁が少し揺らいだ。岩壁を拳で叩いてみたら、乾いた音がした。

岩壁の向うは空所になっているのかも知れない。扉を叩いているような気になった。

空気孔のあたりに掌を押し当て、一、二、三度押ししてみたらずに岩壁が軽くなった。

とたんに砂礫が天井から降り落ちて来た。

坑道が崩れ落ちるのかと、玉江は一瞬のこと身構

えた。砂挨りを頭からかぶったが、何でもなかった。

岩壁が不思議なことに半回転していた。

冷えた空気が一度に伝わり、玉江は闇の向うにぽつかり開いた洞穴があるのを知覚した。

玉江は、はじめてこの時、神の祠ほこらを発見したのであった。勝が待っている場所にもどつたら、苦しそうな息の下で勝が精一杯の叫びをあげていた。

坑道の少し先にはまた堅穴がある。

その深みの穴に向けて勝は声を絞り上げた。

「シンゲンはみんな死んでしまふんや。わしも見事に死んだるからなあー」

そう言いながらも、何度か咳込んだ。

気道の奥で血の泡が吹いているかのように、ごぼごぼと嫌な残響音がした。

岩室に勝を伴い、はじめて二人だけの抱擁を重ねた。二人とも素っ裸であった。

「なあ、とうとう死ぬるぞ。わしが玉江の首を締めたる。お前もわしの首を締めるのや」

平らな岩床にあお向けになった勝の体の上に玉江はおおいかぶさった。玉江の頭は勝の足のほうにある。女の秘部は勝の唇のあたりに押しつけられていた。

玉江は、勝の男のものを口に含んでいた。

口中に含み、舌先で転がしたらわずかだが、勝のそれが勃起の兆候を見せてきた。

「ええか、死力をふり絞つての情交や。わしは絶対に最高のものを味わいながら死にたいのや」

とても長い時間をかけて愛撫してくれた。

ここに来るまでに二人は男と女の至高の愛を貫いて死ぬことを約していた。あの、首を締められ、絶命する瞬間の脈動感を勝は求めたのである。

男と女の性器の部分だけに死を賭けた愉悦の一瞬が訪れるのだった。

その話を持ち出した勝に、玉江は気になっていたことを問い質した。

「な、勝さん、ほんまに女の人を殺したんか？ほんまに首締められて苦しゅうなった時、あそこはぎゅつと締まるんか？」

「…そうや。死んだ女かて、その一瞬は最高になるのや」

「うちにその女の人の代りしてくれいことなんか？」
「代りやない。わしは二度目や。そやけど、わしは生き残つてもうた。わしだけがもしかしたらええ思いしたんかも知れん。今度はほんまにわしも死ぬ。その時な、わしのがびくびくつと脈打つ。そんな時、殺してと叫ぶのや、わしがおまえの首を締めたる。ええな」

勝は怖い顔をしていたに違いない。

もしかしたら。勝が強姦の末、女を殺したというのは嘘で、前にも勝は好きな女と心中事件を起こしたのかも知れない。

ふと、玉江は、勝のことばの端々からそんなことを考えた。暗い岩室に、玉江の喘ぎ声が充ちていく。

狭い岩穴に反響し、増幅されて玉江の歓びの声は広がっていった。小さな肉粒が舌尖で剥かれていた。下から上へと、根元の部分がこすり上げられた。

ぴっぴつとその度に律動が起り、子宮の奥の肉の壁にその脈動感が直結された。だんだん登り詰めていく。玉江は口中に含んだ勝のそれに歯を立てたくなった。いや、堪え切れずに歯を立てていた。

食い千切りたい思いに駆られている。
もう欲しくなっていた。

勝のそれはやっと受け入れられる状態になっていた
「なあ、もう入れて！入れてもええか…」

勝の返事を待たずに、玉江は一旦体を離す。今度は向い合っていた。

勝の体の上におおいかぶさって行った。

「ほんまに殺せ！わしが出す瞬間にな！」

病人とは思えなほどの凜とした声だった。ぬるりとした触感だった。それだけ玉江の裂口部は濡れていた

のだった。

玉江の肉の穴はしっかりとくわえたものをしごきにかかった。いや、おのれの快感を高めようとして腰を激しく上下したのだった。

「ああ、まだあかな……」

苦しそうに体の下で勝が眩く。

なぜか、気持は高まっているのに男のそれは力を失って行く。

「勝さん、出すのやでー！」

玉江は腰を使い、こねくり回すように大きな円を描き、その動きに上下の運動を加えた。

しっかりとくわえ込んでいたから勝は最高の結合感覚を授けられているはずだった。

「あかん、なあ、首締めてくれ、わし、出したいのや」

必死の声に聞えた。それで、玉江は体をつないだまま、両手を勝の首に回した。

のど仏に両手の親指の腹を当てた。ぐいと締める。

「うーっ、もつとや、もつと……」

一気に締めなかつたので、ごぼつと、また咳きの音を響かせた。暗闇のことで勝の顔は見えなかつたが、その時、勝は、かーつと眼を見開き、宙空を睨み返していた。もどかしい思いに、勝がまた叫ぶ。

「思い切りや！あうっー！」

声と同時に玉江が指先に力を込めた。

その瞬間、勝は玉江の首を掴もうとしてか、両手を突き出した。ひそみにくくわえ込まれたものが一瞬、賦活ぶかつの力を持った。

堅い肉感が肉壁に伝えられる。びくっびくっつと身を震わせるような脈動感がそこに生じていた。

「あーっ、気が行くうっ……」

そう玉江が感じた瞬間、結合されていたものが急に萎んだ。絶頂感を強く持った分だけ、勝の首には力が込められようとしていた。

「勝さん……」

玉江は陶酔感の最中から急に醒めていた。

玉江の首を締めるために差し出された手は力なく岩床の上におかれていた。もう一度、名を呼んだがもう勝は答えなかった。まだ体は暖かい。

肩を揺ると力なく首が左右に揺れた。

つと、玉江が体を離れた時、ぬるりとしたものが玉江の股間を伝った。死ぬ問際に精液を奔らせたのか、それとも死んだあとに体が力をなくし、それはのたりと流れ出たのか。もう、勝は死んでいた。

一人、玉江は取り残されていた。

へなへなど、そ場に坐り込む。勝が死んだためではない。子宮の奥にまでぐつと突き上げるものがあつて、たしかに強い収縮の力を感じた。絞り切られたあとの弛緩が訪れていた。腰が自由にならないのだつた。

勝が死んだのに、そのことを考えずにまだ陶酔感の余韻の中に身をおいていた。

ややあつてから、いま自分が置かれている状況がわかつた。一人の男の死体を前にした全裸の女がいた。やつと愛しい男が命絶えたことを知つた。なぜだかわからない。無性に勝のことがいとおしくなり、玉江は力を失つた勝の性器にむしゃぶりついた。

“勝は、わたしに殺して欲しかったのだ”と玉江はその時思つた。約束ではお互いに首を締めるはずだつたのに、勝は彼女の首を締めようとはしなかつた。

闇中に伸びた勝の手にはそんな意思はなかつた。そのことには、玉江は気付いてはいなかつた。

三日三晩、玉江は勝の死体と一緒にいた。

そつと葬つてやる場所を探した。

岩室に続く坑道の奥に、氷の洞穴を見つけ、勝の死体をその場所に移した。死ぬ気にはなれなかつた。

勝の願いをきいてやつただけで、自分では勝につくしたと思つていた。

女である玉江には、勝のように死への美学なかつた。

好きだつた男が病いで痩せさらばえて行くなど嫌

なことだった。きれいな横顔をそのままに勝は地底の岩室に葬られたのだ。

なによりも玉江は健康な肉体を持っていた。

まだ、二十一歳の若さ、性を生きたまま享樂する道を選んだ。それに好きになった男とは死んだあと、この岩室にさえ来れば会うことができるのだった。

廃坑を出る時、玉江は勝の分身を懐紙に包んで出た。男の陰毛を手にした。勝への思いを忘れないためにいつも肌身離さず持つて歩いた。この白口坑の暗所を出たあと、また玉江は勝手知った神戸の街にもどった。

葉室勝に会うために数度、勝の菩提所を訪れた。不思議とこの場所に来ると心が安らいだ。

一人きりになると、なぜか、和んだ気持になるのだった。小さい頃、義父の豊吉の乱暴を避けて山の洞穴に潜んだことがある。

その秘密の場所で過ごす時間はどこか間のびしていて、心から落着けた。

なにかを考えたわけではないが、一人だけの、あれは自由な時間であつたのである。

また、尾形玉江はこの、ひっそりとした暗闇に舞いもどつた。今度は追われる身だったが、そんな切迫感は何一つなかつた。

闇がすべてを包み隠してくれるように思えた。